

【 藻場の保全 】

相島の漁場を守るための取り組み

相島藻場保全活動組織 真鍋 義臣

発表内容

1. 地域の概要
2. 地域の漁業、藻場の現状
3. 活動組織の概要
4. H27年度までの活動状況
5. H28年度からの活動計画
6. H28年度からの活動実績
7. 今後の課題と抱負



1. 地域の概要

◎相島の特徴

- 福岡市の東隣の新宮町に属す
- 島の周囲約7km、面積は約1.22km²
- 生活の拠点は波当たりが小さい南側
- 朝鮮通信使の客館がおかれていた歴史的に重要な場所
- 福岡空港に北から着陸する場合に窓から見える島
- 真珠養殖が盛ん



海食洞の「めがね岩」
県指定文化財(名勝)



相島積石塚群



朝鮮通信使の石碑



MIKIMOTO
No.073 Prestige
相島パールコレクション
MIKIMOTO HPより

2. 地域の漁業、藻場の現状

◎相島の主な漁業

- 一本釣り、カゴ漁（カナトフグ、コウイカ）
- 採貝、採藻、刺網、イカ釣り、小型定置など
- かまぼこ、ひじきコロッケなど商品開発、いけま売りなどの活動により水産物の消費拡大を図っている

◎相島の藻場の現状

- 島の北側には藻場がみられるが、南側では海藻が少ない
- 南側では、ウニ駆除作業を行っているがガンガゼ類が多い。
- 最近では植食性魚類も増加している



3. 活動組織の概要

- 発 足：平成22年4月、それ以降継続
- 構成員：37名（令和2年4月時）

若潮の会（島の青年部）14名、ダイビングショップ7名など



学習会の様子



ウニ駆除の参加者
(ダイビングショップ参加者含)



母藻投入の活動状況

4. H27年度までの活動状況（第1期対策）



平成25-27年度までは、島の東端側で保護区を設定し、その中でウニ駆除を実施
→なかなか成果が出なかった

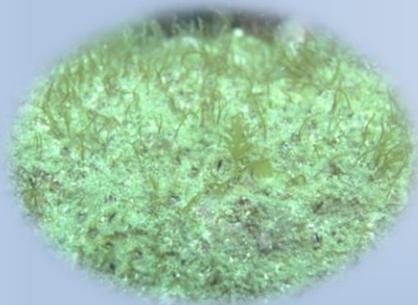
アカモクの幼体がついた礫の移設、アカモク、イソモク、マメタワラのオープンスポアバッグによる母藻投入



◇H26.6にはノコギリモク、マメタワラ、エンドウモクを用い、それぞれオープンスポアバッグ（計250袋）や、中層網方式での母藻移植を行った。

◇H27.7には、アカモクが繁茂する東側水域の礫を約130個回収し、それらを船上から活動区へ投入。

◇モニタリングでは、活動範囲より東側にノコギリモクとアカモク等の繁茂を確認。



幼体のアカモクが着生する礫



5. H28年度からの活動計画（第2期対策）



周辺環境と協定範囲との関係を考慮して、活動の開始場所を西側に設定

平成28年度からの活動計画



観察定点を6点設定しモニタリングを行う。

そのうちSt.1、St.3、St.4の3地点ではそれぞれで深所と浅所を設定し、詳細なモニタリングを実施。

6.H28年度からの活動実績(第2期対策)

ウニ駆除活動



石の隙間に潜むガンガゼを、ウニ鉤を使って引きずり出して潰します



ガンガゼ類は、再生しないように確実に叩き割ります

母藻投入(6月)



ひとつのアサリネットにホンダワラ類を3株ずつ結束バンドで取り付けます



目的の場所でブイを投入し、船上からブイを中心に集中して投入します



ノコギリモクの生殖器床



母藻の投入状況



【再生】

母藻の設置状況

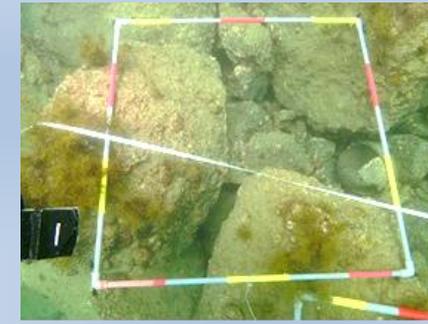
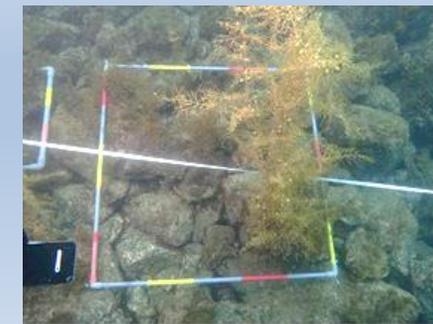
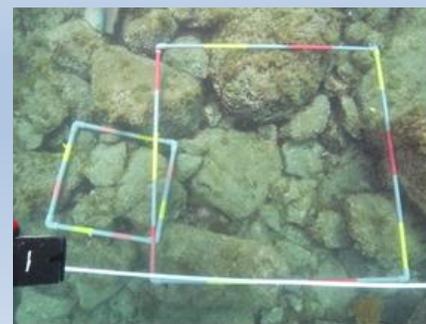
St.1

H28年度

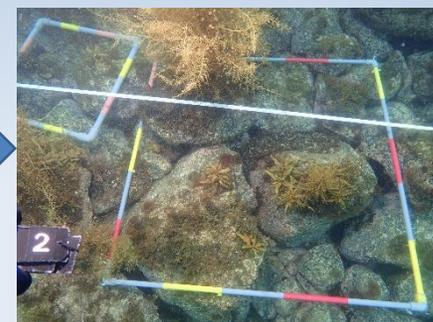
R1年度

R2年度

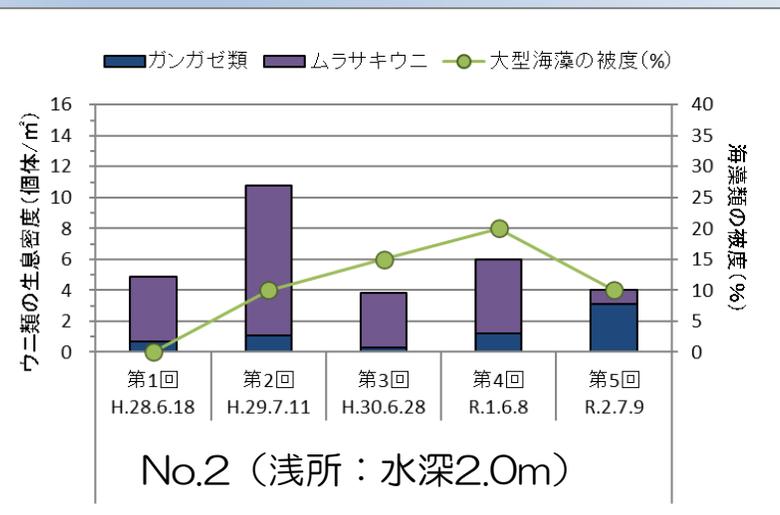
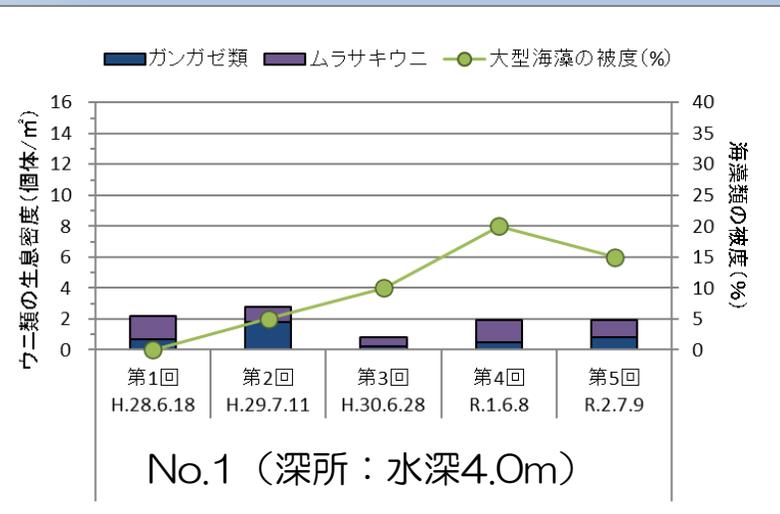
No.1



No.2



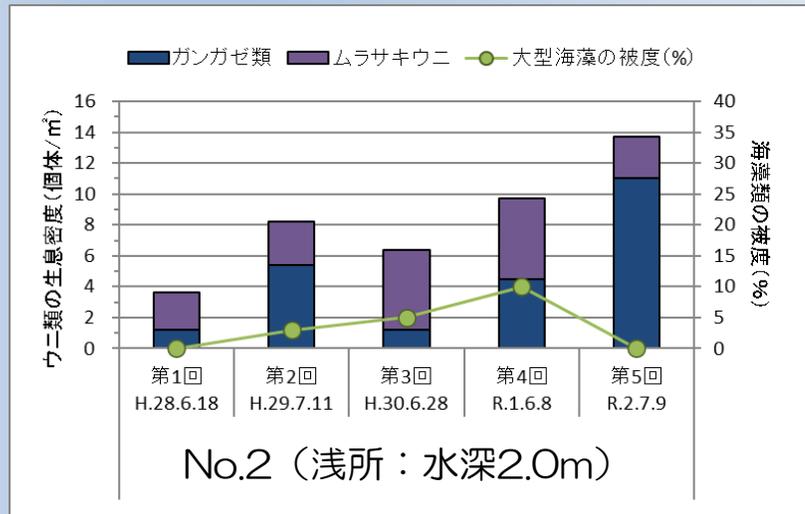
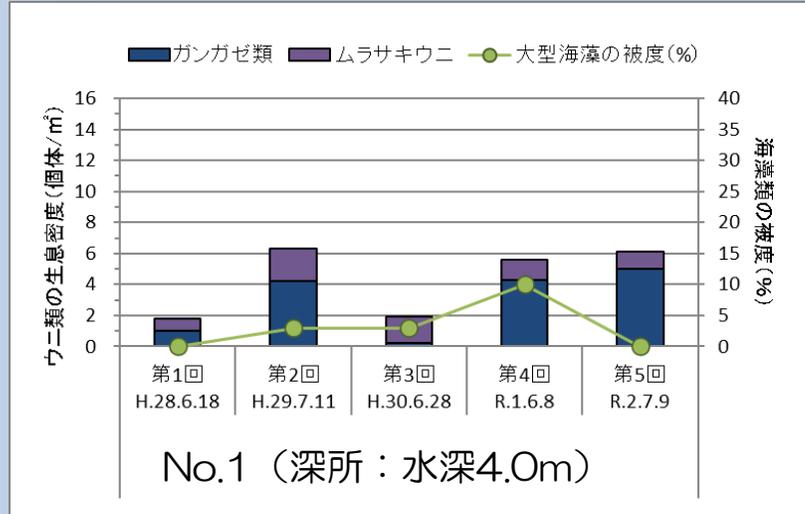
周辺



St.1におけるウニとの大型海藻の被度の推移

母藻投入後に確認されたノコギリモクの幼体

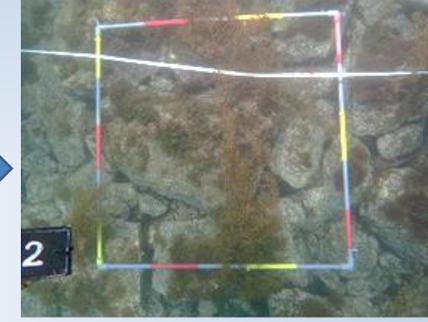
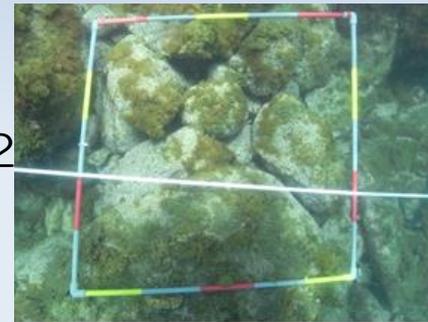
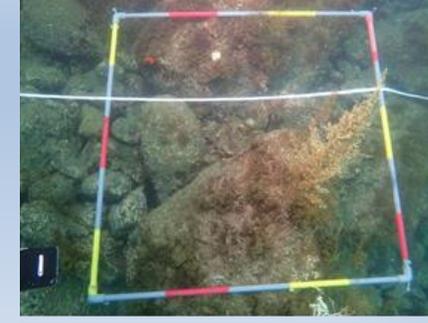
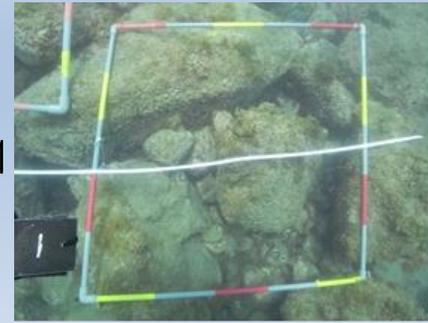
育った海藻には魚が集まっていた



No1

No2

周辺



St.3におけるウニとの大型海藻の被度の推移

ウニ類の観察状況

取り残しのガンガゼが散見



使用器材の機能や使い方講習



潜水の講習



潜水の講習



ウニ駆除の講習



潜水器材を付けてウニ駆除



海中で潰したガンガゼ類



ウニバスターも使用してみた



ウニバスターによるウニ駆除



集合写真

令和2年度の9月1日にはウニ駆除を目的とした潜水講習が行われ、ウニ駆除も実施された。さらに、9月26日にはウニバスターを用いたウニ駆除も行われた。この2回で約2,700個体のガンガゼ類が駆除された。

7. 今後の課題と抱負

これまでの活動結果より、藻場を再生させるには以下の2つのことが重要であることがわかってきました。

1. ウニ類の食圧を下げた状態を維持すること。

2. 適切な時期に適切な種類のタネまきを行うこと。



1.については、複数年にわたり生息密度が低い状態を維持できていない。

→ 活動できる人員に対して、活動範囲が広すぎるのが原因である。狭い範囲で構わないので、密度管理をしっかりとできる範囲を設定して、活動を実施することが肝要である。

2.については、母藻に用いた種類の海藻が出現するようになったことから、タネまきは成功していると思われるが、ウニ類の摂食によりほとんどが消失している状態であると思われる。

→ きちんとウニ類の生息密度を下げた状態で実施するほうが効率が良い。

◇過去にみられたクロメで構成されるアラメ場の再生を最終目標とし、計画的に継続的な保全活動を実施して、藻場を再生させていきます。まずは、ホンダワラ類で構成される安定した藻場の再生を実現させます。

豊かな藻場ができるようにこれからも頑張ります



マメタワラに産着された
アオリイカの卵囊塊



真珠養殖ロープに流れ藻が掛かった
状態。ウニに摂食されないため、
良く育つ。播種が期待される



観察地点周辺でウニが少ない所には
藻場がみられる